

光明寺だより

第95号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030 西条市大町550

TEL 0897-53-4583



心に残る詩

紫陽花のような

東京都 木全 奈都子 (40)



紫陽花は雨の中
 ただただ静かに
 その身を濡らす
 太陽の光をさんさんと
 浴びるひまわりには
 なるうともせず
 比べようともせずに
 己だけであろうとする
 私もそうでありたい
 人と比べることをせず
 卑屈になることもなく
 自分にできる精一杯で
 生きていきたい
 ただそこに在るように



産経新聞「朝の詩」より

新盆合同追悼法要

8月13日・14日

★開始時間（両日とも）

第1回目 午後6時30分

第2回目 午後8時



日本の歴史や文化の素晴らしさを国内外に広く発信していこうと、年間150回を超える歴史講座を全国各地で精力的に行っている白駒妃登美さんという方がおられます。彼女の講座には「こんな歴史の先生に出会いたかった」と涙する参加者が続出しているそうです。

そんな彼女の著書『感動する日本史―日本人は逆境をどう生きたか』に、東北大震災で被災者の支援をした米軍将校の言葉が紹介されていました。

.....

「支援物資を持って避難所を訪れた私の目にもまず飛び込んできたのは、着の身着のままで数日間過した人々の、憔悴し切った表情だった。まるで地獄を見るようだった。

みんなどれだけお腹を空かせているのだろう？ やつと届いた支援物資を、みんなが我先に奪い合うのだろうか。ところが、私の予想に反して、被災した人々は、誰も取り乱すことなく、整然と並んだのだ。私は

そのことにまず衝撃を受けた。

『何故私たちがこんな目に遭わなければならぬの！』と怒りをぶつけられても仕方がないと覚悟していたのに、支援物資を受け取った人々は、誰もが深く頭を下げ、笑みさえ浮かべて、感謝の言葉を口にしている。抗えない運命に対して、静かに服従する人々の姿に私は深く感動した。

ところが、しばらくして私は「ありがとう」のほかに、避難所の人々が共通の言葉を口にしていることに気がついた。彼らは何と言っているのだろうか？ 気になった私は、その言葉の意味を通訳に尋ねた。

『私たちは大丈夫です。でも、この避難所の外には、私たちよりもっと寒くて、もっとお腹を空かせた人たちがたくさんいます。その人たちに先に届けてあげて下さい。私たちはその後で大丈夫ですから』と、語る通訳の言葉に私の心は震えた」

そうして一瞬言葉をつまらせ、「この地獄のような光景の中に、本当の天国があった」と、語ったのです

米軍将校の言葉を紹介した白駒さんは次のように述べています。

私は、この将校の言葉に日本人の果たすべき役割が凝縮されているのではないかと……そんなふうに思えて仕方がないのです。

『この世は対立する二つのものによって成り立っている』とするのが二元論です。二元論に従えば「天国と地獄」というのは対立するものです。でも私たちは、もう気がついていっているのです。天国と地獄という相反するものが存在するのではなく、本当はこの世に生きる私たちの心ばえ一つで、この世が天国にもなるし地獄になるところを……

みんなが自分の事しか考えていない状況は、この世を地獄に変えます。たとえ物質的に豊かでも、そこに生きる人々の心が貧しければ、この世は地獄です。反対に、私たちが互いを思いやり、ゆずりあい、与え合って生きれば、この世は天国になります。

「こう生きれば、この世が天国になるよ」という天国のモデルケースを体現すること、そしてそれを日本から世界に発信することが私たちの役割ではないか。

先人たちが大切に育んできた、日本人らしい素敵な生き方の中に、私たちが幸せに生きるためのヒントが溢れている。

.....

「天国」という言葉にはいささか異論がありますが、ここでは仏教で言う「極楽浄土」の事として話を続けます。

白駒さんは天国と地獄は相反するものとして存在しているのではなく、私たちの心ばえ一つで、この世は天国にも地獄にもなると仰っています。これは「縁起即実相」、「二即一」（二つであって一つ）、「一即二」（一つであって二つ）と観る仏教の物の見方、考え方に大変近いものがあります。

以前こんな話を聞いたことがあります。ある信者がお釈迦さまに「地獄と極楽はどこが違うのでしょうか」と尋ねるのです。するとお釈迦さまは「それならば今から地獄、極楽で食事が始まるから、その食事風景をみればよく分かるぞ」

そう仰ると、まず地獄の食事風景を見せるのです。そこでは痩せ細った亡者が一メートルもあろうかという箸を使って、必死の形相で食べ物を口に運ぼうとします。しかし箸が長いためどうしても口まで届きません。いらだつ亡者は、周りの人の食べ物にまで手を出しますが、勿論、食べることは出来ません。そのうち、亡者同士の罵り合いが始まり、またたく間に食堂は怒号の渦巻く争いの場と化していました。

続いてお釈迦さまはその信者に極楽の食事風景を見せるのです。

極楽の食堂は地獄の食堂同様、食事の内容も長いお箸も変わらないのです。ところが極楽の人々はガリガリに痩せ細った地獄

の亡者と違って丸々と太っているのです。その食事風景はというと、お互いに長い箸で食べ物をつまんで、「どうぞ、どうぞ」と向かい合っている人に食べさせているのです。極楽の食堂はまことに和やかな空気に包まれていました。

食事風景を見終えた信者は、地獄極楽の違いをはっきりと知ることが出来ました。そうです！

「自分さえよければ…」という自分の事しか考えないその心の貧しさが地獄を作り出していたのです。一方、いつも相手の事を思いやり、相手の喜びを私の喜びとしていく、そんな心の豊かさを持った人々の住む世界が極楽だったのです。だから同じ長い箸を使っても、それが争いのタネなることもあれば、逆に喜びのタネになることもあるのです。地獄極楽は表裏一体の世界なのです。二つであって一つ、一つであって二つ。白駒さんの仰るこの世は天国にも地獄にもなるというのはこのことなのです。

そうして白駒さんは、被災者の素晴らしき生き方（他を思いやり、慎ましく、礼節を失わず、感謝を忘れない）を見て、それはすでに私たちの先人が大切に育んできた生き方であり、その生き方を世界に発信していくことが私たち日本人の果たすべき役割だと仰っています。

これは、まさに仏教の説く縁起の道理に

基づいた生き方に相通するものがあります。お釈迦さまは、この世界はあらゆるものが縁りあい支えあって（縁起）成り立っている、だからその道理に従って生きなさいと仰いました。

その道理に従って生きていく時、私たちは自分一人で生きているのではない、多くのおかげをいただいて、生かされて生きているという事実が目覚めます。

その事実が目覚める時、「あなたの幸せは私の幸せです。あなたの悲しみは私の悲しみです」という他を思いやる同悲同苦の心を持った人を仏教では菩薩と呼びます。

仏教は、私たちの生きてゆく世界が、そのような人々（菩薩）の住む世界になることを教えるの目的にしているのです。

こうして白駒さんの著書を通して、私たち日本人の生き方の素晴らしさを見てまいりましたが、この見事な生き方の背景には、仏教の教えが色濃く反映されていることを、つくづく感じさせられました。



特集

第25代専如門主伝灯奉告法要



第25代 専如門主 伝灯奉告法要記念

さる4月27日(木)、西条組6ヶ寺・総勢108名(光明寺からは25名)による「第25代専如門主 伝灯奉告法要」の団体参拝を実施いたしました。

本山に到着後、特別公開中の国宝の書院・飛雲閣の拝観や記念写真の撮影等を行なった後、阿弥陀堂に入室し法要に臨みました。今回の法要は阿弥陀堂、御影堂の両堂を使った法要で、両堂とも参拝者で埋め尽くされました。

記念法話に続き雅楽の奏でられる中、紫衣に緋色の五条袈裟に身を包まれたご

門主が阿弥陀堂に、前門さまが御影堂にそれぞれ入室され、正信偈のおつとめによる「奉賛伝灯作法」がとめられました。途中「依経段」(正信偈の前半部分)を終えたところで、ご門主が御影堂へ、前門さまが阿弥陀堂へ移動(「ご転座」)され、引き続き「依釈段」(正信偈の後半部分)のおつとめが再開されるという、両堂一体となった法要が厳修されました。おつとめの後、親鸞聖人のご消息の一節を現代語訳にした「拝読文」(*下段参照)を全員で唱和をし、参拝者はそれぞれ念仏者としての自覚を新たにいたしました。

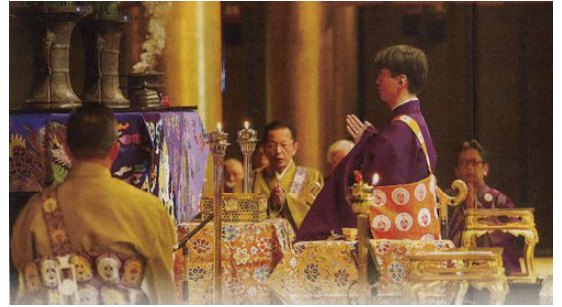
法要後、「伝灯のつどい」が開かれ、大谷宗家の皆さま(門主ご家族・前門ご夫妻)が登場され、宗門関係の幼稚園児からの花束贈呈やご門主ご夫妻、ご長男・敬さまへのインタビューなどが行なわれました。とりわけ敬さまのお言葉に御堂はほほえましい空気に満たされました。

伝灯奉告法要というご勝縁に出遭えた我々一行は本願寺を後にして宿泊先の琵琶湖のホテルへ移動しました。懇親会場では、住職よりこの日(4月27日)が39回目の誕生日だということが披露され、旅行会社から急遽バスデーケーキとワインがプレゼントされるというハプニングもあり、和気あいあいとした懇親会になりました。翌日は嵐山の散策、大覚寺の拝観、嵯峨料理の昼食後、午後6時過ぎ西条に帰ってきました。両日とも天候に恵まれ、大変楽しい有意義な旅行になりました。参拝者の皆さん大変お疲れ様でした。

* 拝読文

すべての人々を救おうという阿弥陀仏の本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり、いかり、おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです

『奉賛伝灯作法』



御影堂の法要風景—阿弥陀堂より転座され、御影堂でお勤めをされているご門主

阿弥陀堂での法要風景—この後読経の中ほどでご門主はで御影堂に転座されます

『伝灯の集い』



大谷宗家の皆さん



インタビュー風景

彼岸会法座開催！



3月22日(木)午後1時より、小林顯英先生をお招きして春の彼岸会法座を開催いたしました。

【講演主旨】

松方弘樹(俳優)さんの死に立ち会った親友の梅宮辰夫さんは、テレビカメラの前で「死んだらおしまいだ」と何度も語っていました。確かにその気持ちは分からなくはありませんが、死んだらしまいではあまりにも空しい人生観ではないでしょうか。親鸞聖人は「お念仏の教えに出遭ったら、空しく過ぎない人生を歩むことが出来る」と仰っています。死んだらしまいではありません。この私の「いのち」は無限のいのちの世界(アミダ=無量光明土=浄土)に還る「いのち」です。これを「往生浄土」というのです。つまり、私の人生は浄土に生まれ往く人生であり、浄土に往きて仏に生まれる人生ということです。しかも私の生まれ往く浄土は「俱会一処」(俱に一処で会う)と教えて下さっていますように、ご縁あるあらゆる人々と俱に会う世界なのです。先立つ人は「一足お先に往って待ってるからね」と言い、送る人は「いずれ私も参ります」と言える、そんな世界がすでに準備されているのです。

2017/03/22

趣味の広場

俳句を楽しむ(七十四)

森本隆を



七月二日、光明寺様より「そろそろ原稿を」との連絡を頂きました。今年七月に入った途端、最高気温が三十四度だ、三十五度だとテレビがうるさく言い、気象予報の時間には「明日は無用の外出を避けるように」などとも言われるようになりました。「無用な外出ってなんだ？」と最初は思いました。聞き馴れるともう気にならなくなりましたが、無用な外出なんてあるのでしょうか。さて、この「光明寺だより」が皆さまのお手元に届くのは七月末頃でしょうか。すぐ八月に入りますね。八月七日はもう立秋ですから、今回はお寺さんの通信らしく、「お盆」にまつわる俳句を見ることにしましょう。俗に言う「お盆」とは本来、旧暦七月十三日から十六日の間に、先祖の霊を迎え、もてなし、送るまでの諸行事をまとめてこう言います。この辺りでは月遅れで八月の行事ですね。まず、八月十三日の当日までにいろいろとお盆の支度をします。

新盆の母にならひし盆用意

日下部宵三

ふたたびりほどの縄なひ盆用意

山本洋子

盆用意全てとのひふと虚し

長谷川浪々子

裏山へ鎌光りゆく盆支度 神野 久枝
お盆の支度をいつから始めるかなどは地方によって色々なようですが、仏壇、仏間、あるいは墓所の清掃、供物の準備などはどの家庭でもすることでしょう。

仏教行事としてのお盆は「日本書紀」には、推古天皇の時代にはもう行われていたという記述があります。十三日には先祖の霊を迷わず迎えるため、門の前で火を焚く「迎火」という行事があり、お盆の風情をかし出しします。

風が吹く仏来給ふけはいあり 高浜 虚子
思ひいま妻と一つに門火焚く 中村 将晴
走り出て幼もかがむ門火かな 森川 暁水
そして十六日は帰る精霊を送っていつて墓参をする、という事になります。

母の姉母の妹盆の客 倉田 紘文
盆過ぎて一人つつ去る母の家 大沢ひろし
独り出て道眺めある盆の父 伊藤 通明
誰待つとなく湯を沸かし盆の入り

伊藤ゆき子

古来お盆の時期は遠く離れて住む家族も出るだけ里の家に帰り、ご先祖の霊に敬意を払いお参りすることは勿論、日頃合うことのない親類縁者が久しぶりに顔を合わせ、旧交をあたためる機会であり、正月と相並んで一年の前後を分かつ大事な節目であります。

私達浄土真宗門徒はこのお盆については、元来、先祖供養は本旨ではないという立場であり、亡き方々は阿弥陀如来のご本願により命終と同時に浄土に生まれ仏となられるの

で、お盆の時期に合わせて家に帰ってくるという考え方は取っていないので、他宗のように盆飾りをしたり、迎え火送り火などの行事もしていないのですが、ご先祖様方に敬意を払う意味で仏壇回りやお墓を清めることはします。また、遠方からの兄弟や子や孫、そして甥や姪などを迎えて楽しいひと時を過ごすことは、人間としてこの上ない幸せなことですね。

盆の夜の煮炊の心をどりかな 岡本 眸
ゆるやかに日暮れて盆の人出かな

横山左知子

山の湯に浮くは農夫の盆の顔 瀧 春一
まあ、細かいことや難しいことはこの際ぬきにして、お盆にはご先祖様を懐しみ、久しぶりの縁ある方々との談らんを通して、人間としてこの世に今ある幸せを感じましょう。



位職書作品



【意味】

善導大師

『無常偈』の一節

人間は慌ただしく毎日を通して、

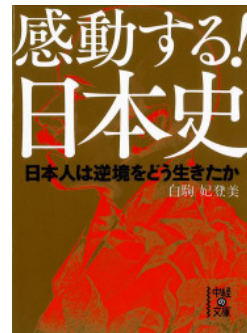
その命が日々刻まれていくことに思いをいたさない。

その命は風の中の灯の如くで、六道の世界（我々の世界）

（迷いの世界）に安らぎはない。



BOOK 本



文庫 中経 700円+税)
美登 白駒
所者 行所
者者 者者
価 価
定 定

本書は吉田松陰、正岡子規ら誰もが知っている人物から、初めて聞くような人物まで、19人の偉人たちの生き方を解説したものです。その生き方によって五章に分類されていますが、それぞれの時代を、強く生き抜いた姿に深い感動を覚えます。

この書を読んだ人は、

★日本人を誇らしく思える一冊です

★日本人なら読むべし。日本が好きになります

★日本でよかった。泣ける一冊です

等々と、絶賛しています。

本書は今回の一口法話でも取り上げましたが、上梓に至った動機を次の様に語っています。

— 先人たちが育んできた日本人らしい生き方の中に私たちが幸せに生きるためのヒントが溢れている。そう信じて、この本を書かせていただきました—



おひがん 彼岸会法座

9月21日(火)

おつとめ 午後1時半

おはなし 午後2時

【講師】 尾道・法光寺住職
季平博昭先生

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



言葉のプレゼント

何が起ころうとも
「想定外」ということはありません
それは「想定の間違い」なのです



「光明寺だより」をご家族の皆さんで
お読みください

★次回発行予定…11月下旬



★4月27日～28日、西条組総勢108名
で本山団体参拝を実施しました。両
日とも好天に恵まれた旅行でした。

(＊関連記事4ページ)

★5月24日(木) 京都にいる長女の
娘(果香5歳)が伝灯奉告法要」で、
ご門主に花束を贈呈しました。

★3月22日(水) 小林顯英先生(大阪・
法栄寺前住)をお招きして春の彼岸
会法座が開催されました。20名の参
拝者がありました。

(＊関連記事5ページ)

★『地図でめぐる神社とお寺』改訂版
(帝国書院発行)に光明寺が紹介され
ます。第一版でも紹介されたもので
す。

★住職の長女(心3歳)が4月から
幼稚園に通い始めました。

